

短歌 — 新元号 —

土田 舞山

新元号を慶ぶ我は大正生まれ百にむかいつつ短歌を詠まむ
由々しくも元号決るや新紙幣ブラックホールと話題は尽きず
大正と昭和平成は波なりき次代の「令和」は動なるやと思う
境内に砂利の響きの木魂こだまして御霊ごたまの声かと恭うやうやしけり
乗船の轟沈されし亡き叔父の青春眠る宗谷海峡
戦死せし五月二十九日を忘れじと鎮魂の詩を折に吟ずる
コスモスを観つつ楽しむように舞う紋白蝶の生に惹かれる
若き日の熱き思いのよみがえる妻の手紙を読みかえすたび
痛みより解かれて妻に声のなし口元震うはさよならならむ
遠慮なくジョークもとびて笑いあう短歌の会は老いを忘れる
生きながら忘れ去られる人思ふ華やかなりし頃の在りしを
炎天にむら雲湧きて雹襲ひょういビニール被りわれも駆け出す
大きくて黒い犬なり飼い主のマダム背を反らせ曳かれつつ行く
潤いし赤芽垣根を見つつ思ふは手入れたゆまぬ主ぬしあればこそ
富士山に励まされ朝の散歩ハッハッふッふッわれは韋駄天